

日本國天皇家論

4章 壬申の乱

日本國天皇家と九州天皇の内戦

天武と唐の同盟

壬申・天武の乱は日本國天皇家と九州天皇家の国家間の戦いであった。だがこの両国間の戦いは我が國內で単独に生じたのではない。東アジアの国際的力学の変化に原因があった。東アジア世界情勢のなかで何が起っていたのか。私たちは事実の中から見えない筋を読んでいくことにしましょう。

- 581 開皇元年隋帝高祖即位・百済、高句麗朝貢
- 589 開皇9年隋南朝陳を平定、中国を統一、百済朝貢、高句麗は朝貢せず。
- 600 開皇20年日本國第一回遣隋使。日本國王は上宮法皇
- 607 大業3年日本國第二回遣隋使。日本國王は上宮法皇
- 608 隋煬帝、答礼使文林郎裴清を派遣。隋、琉球を侵略。高句麗を侵略
- 618 大業13年隋煬帝の従兄弟、李淵がクーデター。隋恭帝に禅譲させ帝位に即く。年号を武徳とする。
唐建国
- 619 日本國遣唐使小野妹子
- 621 武徳4年、唐、洛陽に進入。王世充鄭國を滅ぼす
- 622 日本國上宮聖王死去
- 631 貞観5年日本國遣唐使。唐太宗の使者高表仁「皇帝倭皇に問う。使人長吏大礼蘇因高等、至具懷」
- 642 百済義慈王、高句麗と共に新羅(女王善徳)侵略。金春秋、唐に出兵要請
- 654 高宗倭国瑠瑯と瑯瑁を貢獻(旧唐書本紀)、新羅武列王即位
白雉4年 遣唐使吉士長丹・高田根麻呂
白雉5年 遣唐使高向玄理河邊麻呂
- 659 (斉明5年) 第四回遣唐使(高宗李治・坂合部石布、津守吉祥(伊吉連博徳)
- 660 唐蘇定方水陸13萬百済平定・百済滅亡
- 662 白村江(唐・新羅勝利、日本國・百済敗戦)
- 664 天智3年 26冠位制定
5月17日百済の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して、表函と獻物とを進る。
10月1日に、郭務悰等を發(た)て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務悰に賜ふ。10月4日に、郭務悰等に饗賜ふ。
12月12日郭務悰等罷り帰りぬ。
- 665 9月23日、唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高等を遣す。等といふは、右戎衛郎將上柱國百済禰軍・朝散大夫柱國郭務悰を謂ふ。凡て254人、7月28日に対馬に至る。9月20日に、筑紫に至る。22日に表函を進る。
- 667 近江京へ遷都
- 668 高句麗平壤陥落
- 670 法隆寺全焼
- 671 天智天皇没・壬申の乱
- 677 新羅統一
- 710 平城京遷都

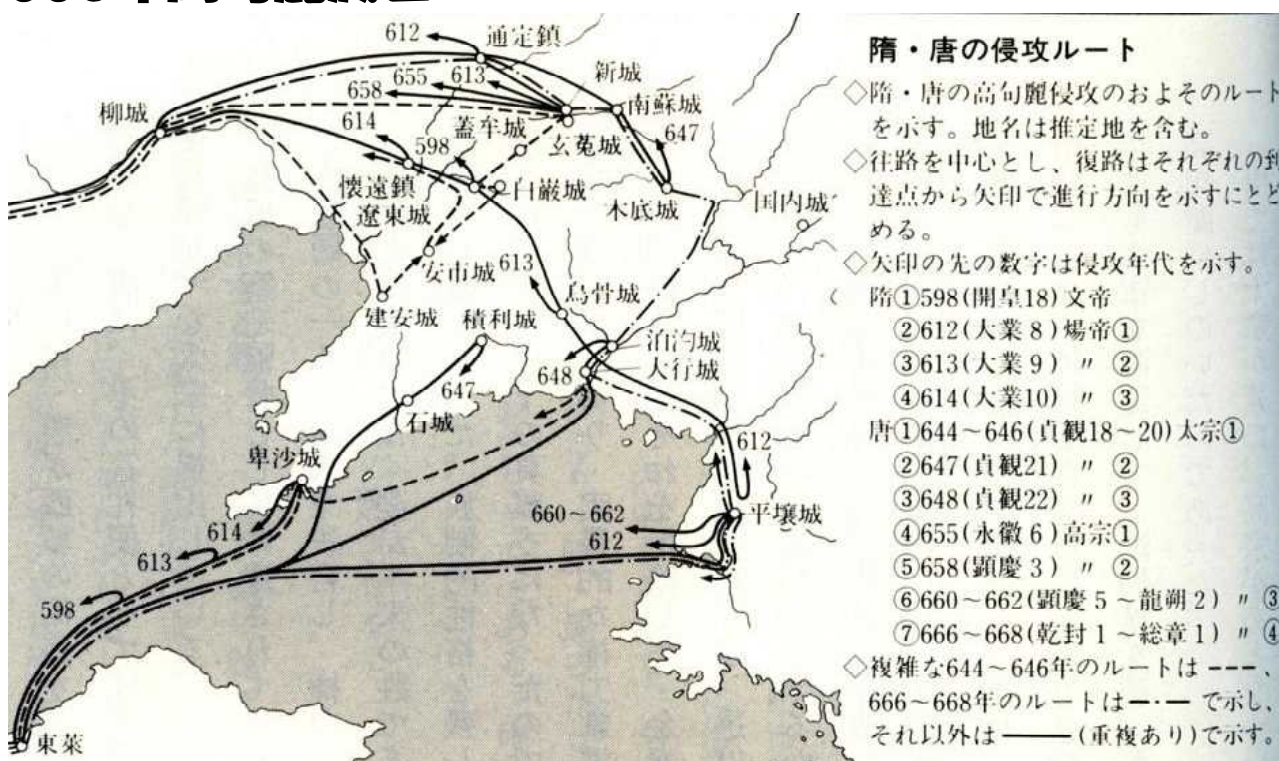
660年百濟滅亡

東アジア激震の震源地は唐である。660年、唐は水陸13萬の軍勢で百濟を攻め平定する。ここに百濟は滅亡する。その後百濟の遺臣は各地で蜂起し、661年に日本から豊璋と救援軍を迎えて全羅北道を押さえるまでに挽回していた。唐・新羅連合軍は「周留城」に結集していた百濟・日本軍を攻撃し、そして662年8月白村江の海戦となる。白村江には新たな救援軍が日本國からやって来る。

此の時、百濟を助けに倭國船兵来たり。倭の船千艘、白沙に停泊する。（三国史記、文武王報書）

白村江にはすでに唐・新羅軍が待ち受けていた。攻撃した日本國と百濟の軍勢は壊滅してしまう。敗戦後日本の将が捕虜となって唐の都に連行されたことは持統紀4年10月に記されている。破れた百濟王・豊璋は高句麗に亡命して百濟はここに完全に消滅した。9月百濟州柔(つぬ)城が落ち、百濟の王族、國人は國を捨てる決心をして日本に亡命することになる。

668年高句麗滅亡



(東潮・田中利明編著『高句麗の歴史と遺跡』から)

唐太宗は647年にも遠征軍を派遣し、また648年にも水軍を派遣したが、いずれも高句麗を打ち負かすことはできなかった。太宗のあとを継いだ高宗は、660年に新羅から百濟攻撃の要請を受けると、13萬の大軍を百濟に派遣し、唐と新羅の連合軍によって、百濟の王都を陥落させ、義慈王を捕らえて連行し、ここに百濟は滅亡した。その上で高句麗に対する侵攻を再開した。

高句麗では、最高実力者の泉蓋蘇文(チョンゲソムン、せんがいそぶん)が666年に死ぬと、その3子の間で権力争いが生じた。長子の男生(ナムセン)は弟の男建(ナムゴン)、男産(ナムサン)と対立し、追われて国内城に立てこもった。翌667年、唐は服属してきた男生に先導させて遼東方面へ軍を進め、その翌年には新羅軍とともに王都・長安城を攻撃した。この唐・新羅連合軍の攻撃に王都は持ちこたえられずに陥落し、宝蔵王以下高句麗の臣僚たちは降伏し唐の長安へ連行され、ここに高句麗は滅亡した。

(http://bell.jp/pancho/kasihara_diary/subfiles/history%20of%20koguryo.htm)

百濟・日本を破った唐・新羅連合は668年高句麗を攻める。平壤が陥落して高句麗も滅びる。唐と戦った二つの国家が消滅してしまった。

671年日本國滅亡

太宰府における対唐外交

日本國はどうなっていくのか。日本國だけは無事存続できたというのであろうか。

664年5月17日百済の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して、表函と獻物とを進る。

10月1日に、郭務悰等を發(た)て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務悰に賜ふ。10月4日に、郭務悰等に饗賜ふ。

12月12日郭務悰等罷り帰りぬ。

664年5月、唐から使者が敗戦国日本國にやって来た。彼らが駐屯したのは筑紫(博多)である。日本國は朝散大夫郭務悰が百済の鎮將劉仁願の使者で皇帝の使者ではなかったので入京させなかったと伝わる。この京とは太宰府である。

百済の鎮將劉仁願の「表函」の内容は明らかになっていない。唐のねらいは何だったのか。唐の支配形体は都督府を置くことである。唐は九州に都督府を置くことを要求したと思われる。

この5月の「表函」に対して日本國はどう答えたか。10月1日に中臣内臣と沙門智祥を派遣して物を賜い、4日に饗応している。「表函」からほぼ5ヶ月経って日本國は唐の要求を受け入れなかったのであろう。郭務悰等が帰国したのは12月12日である。

665年9月23日、唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高等を遣す。等といふは、右戎衛郎將上柱國百済禰軍・朝散大夫柱國郭務悰を謂ふ。凡て254人、7月28日に対馬に至る。9月20日に、筑紫に至る。

22日に表函を進る。冬10月の11日に、大きに菟道に闕(けみ)す。

そして翌年の665年、今度は朝散大夫・司馬上柱國・劉徳高が国書を持ってくる。9月20日に筑紫(博多)に到着して22日に表函を献上している。その相手は日本國王である。日本國の王とその重臣たちはこの時どこにいたか。太宰府である。日本國朝廷は太宰府にいて唐との外交に当たっていたのである。

日本國は10月11日に上柱國劉徳高歡迎行事を菟道で行っている。ます。この菟道も北九州である。

九州天皇家と新羅

戦勝国が唐であると同時に新羅であったことに重要な意味があった。日本國が百済と軍事同盟を結んでいた一方で九州天皇家は新羅と友好関係にあった。

此の時、新良(しらぎ)の國王、御調八十一艘を貢進(たてまつ)りき。爾に御調の大使、名は金波鎮漢紀武(こむはちむかむきむ)と云ふ。此の人深く薬力を知れり。故、帝皇の御病を治め差やしき。是に天皇、天の下の氏氏名名の人等の氏姓の忤(たが)ひあやまちてるを愁ひたまひて、味白梔(あまかし)の言八十禍津日の前に、玖詞瓮(くかべ)を居(す)えて、天の下の八十友緒の氏姓を定め賜ひき。また木梨輕太子の御名代と為て、輕部を定め、大后の御名代と為て、刑部を定め、大后の弟、田井中比賣の御名代と為て、河部を定めたまひき。
(古事記・允恭)

ここには、九州天皇家は、新羅とは友好関係にあったことが示されている。「新良」の大使は天皇の病を治している。新羅は「新良」と表記されているが、この読みは「しんら」である。「しらぎ」は百済サイドからの読みで、ある種の侮蔑を含む。本来の国名は「しんら」である。九州天皇家は「新良」と本来の国名で記しているのはこの両国の友好関係を示している。当時日本國は百済・高句麗と友好関係を結び、九州天皇家は新良と友好関係を結んでいた。

日本國と百済・高句麗がいかに親密な関係にあったかということは日本國王・上宮聖徳法王が最初に手がけた大寺院法興寺を造営した際の関係に表れている。寺の命とも云うべき仏舍利を献上したのが百済國であった。

是歳(崇峻元年)、百済國、使併(つかひあはせ)て僧惠総・令斤(りょうこん)・惠寔(えしよく)等を遣

(まだ)して、佛の舍利を献る。百済國、恩率首信・徳率蓋文・那率福富味身等を遣して、調進(みつきたてまつ)り、併せて佛の舍利、僧、聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道嚴・令開等、寺工太良未太・文賈古子、鑪盤博士将徳白味淳、瓦博士麻奈文奴・陽貴文・稜貴文・昔麻帝彌、畫工白加を献る。

この佛舍利が、「法興寺(現法隆寺)」の五重塔の下に納められていた仏舍利である。日本と百済・高句麗は固い同盟関係にあった。朝鮮半島では百済が大国で新羅は百済から侵略を受けていた。

九州天皇家天武の蜂起

九州天皇家にとって日本國の白村江敗戦は危機ではなくチャンスであったともいえる。朝鮮半島と日本列島を支配してきた百済・日本國同盟が崩壊したのである。替わって唐・新羅が極東アジアの盟主の位置に登った。この変化は日本列島内の国家間の力関係に影響を及ぼし日本國と九州天皇家の関係に影響を与えた。

この情勢変化に立って九州天皇家・天武は蜂起した。これが壬申・天武の乱である。この内戦を天武VS大友王、叔父VS甥の身内の戦い、同王朝内の権力闘争に矮小化したのは天智紀編者である。東アジアの激変、百済・高句麗の消滅という歴史の中で同じ敗戦国であった日本國だけが無事に凌ぎきったとはいえない。日本國も消滅してしまう。唐は結果的に百済・高句麗・日本國の三國を歴史から消し去ったのである。

真実の壬申の乱は日本國と九州天皇家との内戦であった。敗れた日本國は消滅し、日本列島は天武九州天皇家の支配下に入った。天武は九州天皇家史上初めての日本列島の王(天皇)となった。日本書紀はこの主権国家の交替を控えめに書いている。天武の意図である。耽羅国の大使に対して筑紫太宰が述べている。

天皇、新たに天下を平(む)けて、初めて即位(あまつひつぎしめ)す。是に由りて、唯賀使を除きて、以外召したまはず。則ち汝等の親ら見る所なり」とのたまふ。(「日本書紀・天武紀下」)

この記述には不思議な言葉がある。天武天皇は「初めての即位」したというのである。何故、「初めて」と断ったのであろう。「初めて」というのであれば二度即位した天皇を除き誰でも初めてである。特に天武が初めてというわけではない。天智も初めてである。しかし天智即位の時にはこのような不思議な言い方はない。この「初めて」には特別な意味が込められている。「初めて即位す」はこれまでは日本國天皇家が代々天皇位に登ってきたが今回は九州天皇家・大海人皇子が初めて天皇位に即いたという意味である。天武が九州天皇家で初めて天皇という位についた。それまでの九州天皇家は北九州一帯の王だったけれども天皇ではなかった。天武に至って初めて天皇位(国王)に即いたのである。

「新たに天下を平(む)けて」にも特別な意味がある。それは天武が日本國を倒して新たに天下を支配したという意味である。隋王朝を倒して唐王朝が誕生したのと同じように、日本列島においても日本國を倒して天武の國が誕生した。新しい国家の誕生であったが天武は新たな国号を名乗らなかった。倒した国家の国号「日本」をそのまま継承した。故に私たちには日本國は連続して存在してきたかのように見える。実はここに主権国家の交替というドラマが存在していた。

天武と唐 日本國の軍事

660年唐蘇定方は水陸13萬の軍勢で百済を攻め百済は滅亡した。日本國は百済再興のため日本國にいた百済の王子豊璋を本國百済に帰す。この時、日本國王は前線指揮のため太宰府に来ていた。

八月に、前將軍大華下阿曇比羅夫連・小華下河辺百枝臣等、後將軍大華下阿倍引田比羅夫臣・大山物部連熊・大山上守君大石等を遣して、百済を救はしむ。仍りて兵杖・五穀を送りたまふ。

九月に皇太子、長津宮に御す。織冠を以て、百済の王子豊璋に授けたまふ。復多臣蔣敷の妹を妻す。乃ち大山下狹井連檳榔・小山下秦造田来津を遣して、軍五千余を率て、本郷に衛り送らしむ。是に、豊璋が国に入る時に、福信迎へ来、稽首みて国朝の政を捧て、皆悉に委ねたまつる。

天智元年五月に大將軍大錦中阿曇比羅夫連等船師一百七十艘を率て、豊璋等を百済國に送りて、宣勅して、豊璋等を以て其の位を継がしむ。又金策を福信に予ひて、其の背を撫でて、褒めて爵禄を賜ふ。時に、豊璋等と福信と、稽首みて勅を受け、衆、為に涕を流す。

天智二年三月に、前將軍上毛野君稚子・間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣譯語・三輪君根麻呂、後將軍阿部引田臣比羅夫・大宅臣鎌柄を遣して、二萬七千人を率て、新羅を打たしむ。

秋八月の壬午朔甲午(13日)。新羅、百済王の己が良將を斬れるを以て、直に國に入りて先ず州柔を取らむことを謀れり。是に百済、賊の計る所を知りて、諸將に謂りて曰はく、「今聞く、大日本國の救將廬原君臣、健兒万余を率て、正に越海を越えて至らむ。願はくは、諸の將軍等は預め図るべし。我は自ら往きて白村に待ち饗へむ。」といふ。戊戌(17日)に、賊將、州柔に至りて、其の王城を繞む。大唐の軍將、戰船一百七十艘を率て、白村江に陣烈れり。以上 天智紀

これらの軍事行動は全て日本國の軍事である。九州天皇家の出来事ではない。九州天皇家は直接、唐・新羅と戦ったわけではない。日本國は622年白村江の海戦に敗れ百済王豊璋は数人と船に乗って高麗に逃げる。この白村江の敗戦から唐との外交が繰り広げられる。その舞台は太宰府であった。

太宰府に於ける対唐外交

662年白村江敗戦の翌々年、唐の使者が日本國にやって来る。

- | | |
|--------|---|
| 第一回唐使節 | 664年5月17日百済の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務棕等を遣して、表函と獻物とを進る。10月1日に、郭務棕等を發て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務棕に賜ふ。10月4日に、郭務棕等に饗賜ふ。12月12日郭務棕等罷り帰りぬ。 |
| 第二回唐使節 | 665年9月23日、唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉德高等を遣す。等といふは、右戎衛郎將上柱國百済禰軍・朝散大夫柱國郭務棕を謂ふ。凡て254人、7月28日に対馬に至る。9月20日に、筑紫に至る。22日に表函を進る。10月の11日に、大きに菟道に閱す。11月の13日に劉德高等に饗賜ふ。12月14日に、物を劉德高等に賜ふ。この月に、劉德高等罷り帰りぬ。是歳、小錦守君大石等を大唐に遣す。 |
| 第三回唐使節 | 665年送唐客使劉德高を送る。唐使法聰来日。 |
| 第四回唐使節 | 11月9日に、百済の鎮將劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等を遣して、大山下境部連石積等を筑紫都督府に送る。13日に、司馬法聰等罷り帰る。小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石を以て送使とす。 |
| 第五回唐使節 | 669年12月又大唐、郭務棕等2千余人を遣せり。671年春正月13日に、百済の鎮將劉仁願、李守眞等を遣して、表上る。7月11日、唐人李守眞等、百済の使人等、並びに罷り帰りぬ。 |
| 第六回唐使節 | 11月10日、対馬國司、使を筑紫太宰府に遣して言さく、「月生ちて二日に、沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝婆娑・布師首磐、四人、唐より来りて曰さく、『唐国の使人郭務棕等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、船四十七隻に乗りて、俱に比知嶋に泊まりて、相謂りて曰はく、今吾輩が人船、数衆し。忽然に彼に到れば、恐るらくは彼の防人、驚き駭(とよ)みて射戦はむといふ。乃ち道久等を遣して、預め稍に來朝る意を披き陳さしむ』とまうす」とまうす。 |

以上はすべて日本國と唐との外交である。外交の舞台は九州博多である。日本國朝廷は太宰府にいた。唐使が表函と獻物を献上した天皇とは太宰府大極殿にいた日本國の天皇である。11月9日に、百済の鎮將劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等が日本國の大山下境部連石積等を送ってきた「筑紫都督府」とは太宰府である。671年12月3日、滋賀県の近江宮に帰っていた日本國天皇が亡くなる。そして672年3月18日に次の記事が天智紀にある。

672年3月18日、内小七位阿曇連稻敷を筑紫に遣して、天皇の喪を郭務儆に告げしむ。是に、郭務儆等、咸に喪服を着て、三遍挙哀る。東に向ひて稽首(おが)む。

21日、郭務儆等、再拜みて、書函と信物とを進る。

5月30日、郭務儆等、罷り帰りぬ。

(日本書紀天智紀)

672年3月18日の記事において唐軍に日本國天皇の死を知らせたのは日本國朝廷ではない。天武である。そして21日に郭務儆が「書函と信物とを進る」と書いたその相手も天武である。日本國王の死を契機として天武は唐と深く結び付く。天武は唐と同盟を結んだ。天武のパワーの源泉は唐であつた。

この密約はむろん歴史の表面には現れていない。私たちの推測である。だがそれを知らせてくれる歌がある。696年に高市皇子が亡くなった。高市皇子は壬申の乱に於ける天武軍の総司令官だった。人麿は高市皇子への挽歌を作っている。

人麿挽歌に詠われた真実

高市皇子への挽歌は万葉集最大の挽歌である。高市皇子の母は胸形徳善の娘尼子娘である。胸形徳善は北九州の豪族である。天武の最初の妻は胸形氏の娘であつた。なぜ天武は北九州の豪族の娘を妻としたか。天武も北九州に居たからである。高市皇子は草壁皇子の死後、太政大臣となり、696年7月10日に亡くなった。

天武は壬申に蜂起はしたが天武の周りには優れた武人も行政官もいなかった。日本國朝廷は左右大臣を中心とした行政府を確立させていたが、九州天皇家は皇親政治と云われた天皇家中心の政權で行政組織は確立していない。天武の不安に対して答えることが出来たのは高市皇子だけであつた。高市皇子もまだ若かつたが天武は軍事権の全てを高市に授ける。高市皇子は大功をたてた。人麿が高市皇子への挽歌で壬申の乱での活躍を歌い込んだのは当然である。そして人麿挽歌には日本書紀が伝えない壬申の乱の真実が詠われている。

高市皇子尊の城上の殯宮の時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

199 かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやに畏き 明日香の 真神の原に ひさかたの 天つ御門をかしこくも 定めたまひて 神さぶと 磐隠ります やすみし わご大君の きこしめす 背面の國の 真木立つ 不破山越えて 高麗剣 和甕が原の 行宮に 天降り座して 天の下 治め給ひ 食す國を 定めたまふと 鶏が鳴く 吾妻の國の 御軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せと服従はぬ 國を治めと 皇子ながら 任し給へば 大御身に 大刀取り帯ばし 大御手に 弓取り持たし 御軍士を あどひたまひ 斉ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆるまでに ささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さり来れば 野ごとに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく 取り持てる 弓弭の騒き み雪降る 冬の林に 颯風かも い巻き渡ると 思ふまで 聞きの恐く 引き放つ 矢の 繁けく 大雪の 乱れて来れ 服従はず 立ち向ひしも 露霜の 消なば消ぬべく 行く鳥の あらそふ間に 渡会の 斎きの宮ゆ 神風に い吹き惑はし 天雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ給ひて 定めてし 瑞穂の國を 神ながら 太敷きまして やすみし わご大君の 天の下 申したまへば 萬代に 然しもあらむと 木綿花の 栄ゆる時に わご大君 皇子の御門を 神宮に 装ひまつりて 使はしし 御門の人も 白袴の 麻衣着 埴安の 御門の原に 茜さす 日のことごと 鹿じもの い匍ひ伏しつつ ぬばたまの 夕になれば 大殿を ふり放け見つつ 鶉なす い匍ひ廻り 侍へど 侍ひ得ねば 春鳥の さまよひぬれば 嘆きも いまだ過ぎぬに 憶ひも いまだ尽きねば 言さへく 百濟の原ゆ 神葬り 葬りいまして 麻裳よし 城上の宮を 常宮と 高くまつりて 神ながら 鎮まりましぬ 然れども わご大君の 萬代と 思ほしめして 作らしし 香具山の宮 萬代に 過ぎむと思へや 天の如 ふり放け見つつ 玉櫛 かけて 偲はむ 恐かれども

短歌二首

200 ひさかたの天知らしぬる君故に日月も知らず恋ひわたるかも

201 埴安の池の堤の隠り沼のゆくへを知らに舎人は惑ふ

或る書の反歌一首

202 哭沢の神社に三輪据ゑ祈れども我が大君は高日知らしぬ

壬申の乱は日本國への九州天皇家の反乱

吾妻の國の 御軍士を 召し給ひて ちはやぶる 人を和せと 服従はぬ 國を治めと

天武は一体誰と戦ったのか。一般的には壬申の乱は天智の子どもと天智の弟との内乱であると考えられている。読まれている。だが、壬申の乱とはそのような同じ王朝内の権力闘争ではない。日本列島を支配統治していた藤原京を首都とする日本國天皇家と北九州(小倉北区・小倉南区・苅田・行橋・香春・田川・下関市彦島)を統治していた九州天皇家との戦いであった。壬申の乱は日本國天皇家に対する九州天皇家天武の反乱であり、天武の革命だった。

人麿はこの乱を「服従(まつろ)はぬ國を治め」と詠っている。人麿は相手を「國(国家)」と認識している。この認識は人麿個人の認識ではなく天武天皇家の認識だった。天武は自らの相手を「服従しない國」と認識していたのである。

天智の子大友王と天智の弟天武の戦い。同じ王朝内の甥と叔父の身内の戦い。これが通常の壬申の乱の理解である。しかしこの場合、人麿は「天智の子」を「服従しない國」と歌うであろうか。人麿は「服従しない國」と歌っている。壬申の乱とは天武と「服従はぬ國」との戦いであった。「服従はぬ國」とは日本國である。

壬申戦の実相

時に大友皇子及び群臣等、共に橋の西に営りて、大きに陣を成せり。其の後見えず。旗幟野を隠し、埃塵天に連なる。鉦鼓の聲、数十里に聞ゆ。列弩乱れ發ちて、矢の下ること雨の如し。(天武紀上)

日本書紀が描く壬申の乱に於ける大友王側の陣容である。大友陣はその最後が見えないほど多数の兵がつめ、旗は野を隠し、埃は天に舞い上がり、鉦鼓の音は数十里に聞こえるという。一体どれほどの軍勢か。ここを読むと大友皇子軍は何万という将兵が集まっているように思える。だがこの描写と瀬田の橋の攻防シーンの描写との間には落差がありすぎる。

最期の攻防は瀬田橋の一枚の長板であった。日本國の軍勢は瀬田橋の板を取りはずし、橋を渡れなくしていた。橋には一枚の長板があった。一枚の板は一人しか歩けない。渡ろうとすると矢を射てくる。この時、甲を重ね着た天武方の武将大分君稚臣が矢を受けながらも一枚の長板を渡り、大友陣に討ち入った。それだけで大友陣はなだれをうって崩れた。大友軍の先頭を守っていたのは「智尊」という人物である。およそ武人らしからぬ名前の人物一人が守っていただけで他の武将の姿は見えない。もやはこれまでと逃げる大友軍の兵士を智尊が切って兵を押しとどめようとした。だが大友軍の兵は逃げてしまった。

大きに陣を成せり。其の後見えず。旗幟野を隠し、埃塵天に連なる。鉦鼓の聲、数十里に聞ゆ。列弩乱れ發ちて、矢の下ること雨の如し。

この軍勢はどこに消えてしまったのか。実はこの軍勢は幻であった。日本書紀編者が「後漢書光武帝紀」を引用して挿入した文飾に過ぎなかった。後漢書にはそのままの文がある。

後漢書光武帝紀

軍陳數百里不見其後

旗幟蔽野埃塵連天鉦鼓之聲聞數十里列弩乱發矢下如雨

大友陣の実景と思われた日本書紀のこの記述は大友陣とは関係なく後漢光武帝軍の実景描写であった。実際の太友陣には兵はほとんど残っていなかった。日本書紀は壬申の戦闘の実相を書かず文飾していた。実相と思われたのは中国史書を単に挿入しただけのものであった。壬申戦の実相を詠ったのが人麿である。この歌は私たちの常識を超える。

斉ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆるまでに ささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さき来れば 野ごとに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく

天武の将兵は「鼓」と「小角」と「幡」を持っていた。珍しく比喻が多い歌詞である。

- (1) 一斉に叩く鼓は雷の音と聞こえる。
- (2) 吹き響く小角の音は虎が吼えているかのようで人は皆おびえる。
- (3) 手に持つ幡は春の野焼きで風にあおられて燃える火のようである。

壬申の乱における天武の軍隊は一斉に鼓を叩き、虎がほえているのかと聞こえるほど多くの小角を吹き鳴らし、野火のように赤々と燃えるように赤い赤旗を翻していた軍隊であった。

701年大宝軍防令には一つの軍隊に大角2つ小角4つを備えたと頭注は解説する。大宝律令は672年壬申の29年後の制定であるから天武軍は大宝軍防令に基づいて装備したのではない。天武軍が所持していた小角は大宝軍防令に決められた大角2つ小角4つのような少ない数ではない。日本書紀天武14年11月に次の詔勅がある。

丙午に、四方の國に詔して曰はく、「大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛の類は、私の家に存くべからず。咸に、郡家に収めよ」とのたまふ。（日本書紀天武14年11月）

九州天皇家では少なくともそれぞれの臣の家には大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛があった。これらの装備武器は壬申の乱で使用されたものだった。壬申の乱においては天武軍の将はそれぞれに大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛を持っていた。それぞれの将は鼓を叩き、大角小角を吹き鳴らし、赤旗を靡かせていた。これが壬申の乱における天武軍であった。「鼓」「大角」「小角」とはどのようなものだったのか。実物はどこにも残っていないし、具体的な記録もない。手がかりは日本にはないが「鼓」「少角」は唐軍の記録の中にある。

朔方から数十里のところ、突厥の兵が集まってくると、唐軍の本隊は後退し、薛万均の兄弟は突厥軍に横撃を加えて、これを撃破した。突厥軍が逃亡すると、唐軍は梁師都を包囲した。諸将は城が堅固で下すことができないと見ていたところ、薛万均是「城中の士気は地に落ちており、**鼓の音さえ聞こえません**。落城の兆しです」と言った。はたして敵は梁師都を斬って降伏してきた。薛万均は功績により左屯衛將軍に任ぜられた。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%96%9B%E4%B8%87%E5%9D%87>

唐と突厥との戦いの描写である。唐軍の将薛万均は城の中の鼓の音が聞こえないので士気を落していると判断した場面である。

堅く守り続ける高句麗の城を攻めあぐんでいた唐軍は、兵力差を活かすことが出来る力攻めを、機械の手を借りて増加させる好機を迎えたと言ふべきかも知れなかった。遼河と鴨緑江間の大きな城の三つの内、二つまでは陥落させたのだが、最後の一つである「安市城」は堅牢無比で鳴らしてただけに、数ヶ月の籠城にも怯むことなく戦意は盛んであったのだから、なお機会を利用しないでは置けなかったのだといえるだろう。寒さに凍えているよりも、攻城戦に向かうという熱さを欲したかと思うばかりの唐軍の勢いは城壁の間際まで押し寄せ、迫った。今度こそという意気込みは兵士達の喊声(かんせい)と、**突撃の合図の鼓や鐘や少角とが城を揺るがせる程の激しさを思わせた**。（<http://blog.goo.ne.jp/basirain/e/ee847cdf0cbf5043be0461cc1d89e1af>）

これは高句麗落城の描写である。此处に合図の鼓と少角が書かれている。高句麗の堅城安市城に迫った東軍は鼓や鐘を打ち少角を吹き鳴らした。

靺鞨(まつかつ、拼音:Mòhé)は、中国の隋唐時代に中国東北部(現在のロシア連邦・沿海地方)に存在した遊牧狩猟民族。

突地稽は右衛將軍に拜され、唐の国姓である李氏を賜った。突地稽が死ぬと、子の謹行が後を継いだ。麟徳中(664年 - 665年)、謹行は營州都督となる。その部落は数千人にのぼり、財力もあつたことから夷人たちに憚られるようになる。のちに謹行は右領軍大將軍を拜命、積石道経略大使となる。

吐蕃の論欽陵らが10万を率いて湟中に入寇して来た時、謹行の兵士は準備をしていなかったが、吐蕃軍が来るのを聞くと、**旗を建てて鼓を打ち鳴らし、開門してこれを待った**。すると、吐蕃軍は伏兵があると思ってそれ以上進めなかった。

上元3年(676年)、謹行は吐蕃軍数万を青海で破ったため、鎮軍大將軍・行右衛大將軍を拝命し、燕国公に封ぜられる。
(<http://jiten.tnc.ne.jp/search.php?keyword=%E9%9D%BA%E9%9E%A8>)

靺鞨の突地稽は右衛將軍に拝され、唐の国姓である李氏を賜った。その子謹行の時、吐蕃の論欽陵が攻めてきた。謹行は旗を立てて鼓を打ち鳴らし、門を開けたままで敵を待っていた。

「鼓」は唐軍の鼓

これらは唐軍の戦闘描写である。唐軍は鼓、鐘、少角、旗を装備していた。鼓と軍鼓とは区別されている。軍鼓とは全軍の進軍、退却などの指揮に使われた大きな太鼓でしょう。鼓は実際はどんな形をしていたのかよく分からない。日本のいわゆる鼓(つづみ)とは異なる。あまり大きな太鼓では持ち運びに不便であろう。またあまり小さすぎても音が高すぎる。唐軍の各兵が持っていた鼓はちょうど腰に着けるぐらいの大きさだったのではないのでしょうか。

現在、沖縄エイサーで使われている大太鼓は肩からひもで腰にぶら下げて叩く。唐軍が打ち鳴らした鼓とは沖縄エイサー太鼓が最も近いのではないのでしょうか。



(<http://blog.goo.ne.jp/wj-aki/e/5b1de81cc952590c6006c5bdac707...>)

この中国のお祭りの写真では太鼓と鉦が使われている。鼓はこのように肩からかけて撥で打たれている。人麿は「**斉ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで**」と詠う。太鼓は一斉に叩いたと思われる。誇張があつたとしても劇場やコンサートホールとちがい屋外で雷の音ときこえるには太鼓の数は100や200はあつたであろう。

「少角」「大角」も唐軍の少角、大角

「小角」と「少角」は同じであるが「小角」とは何か。吹奏楽器だがどのようなものだったのであろう。「角」という漢字からやはり「角(つの)」で作られたものと思われる。何の角か。たくさん手に入るとすればそれは羊である。下の二つの写真は中国のHPである。「小角」は観光客に売られている。「大角」は大きな角で作られた角笛、

「小角」は羊の小さな角で作られた角笛だったのではないのでしょうか。人麿は虎が吼えるようだと言っているの
で、この数もまた100や200でなかったのでしょうか。



羊の大角

<http://photozou.jp/photo/show/234425/26803577>



羊の小角

<http://4travel.jp/overseas/area/asia/china-xinjiangweiwuerzu>

「弩」は唐軍の弓

取り持てる 弓弭の騒き み雪降る 冬の林に 颯風かも い巻き渡ると 思ふまで 聞きの恐く 引き放
つ 矢の繁けく 大雪の 乱れて来れ 服従はず 立ち向ひしも 露霜の 消なば消ぬべく 行く鳥の
あらそふ間に

大意

取り持っている弓弭の鳴り響くさまは、雪の降る冬の林につむじ風が吹き巻いて押しわたって行くの
かと思うほど聞くも恐ろしく、引き放つ矢の繁く多いことは大雪の乱れ降るようで、従わずに立ち向かっ
た敵軍も、死ぬなら死ぬと命をかけて争うその時に（頭注199）

人麿の歌としては珍しく比喻が多いが戦に使われた武器の一つが弓である。この
弓はいわゆる和弓と異なる。この弓のことは天武が14年に武器もまた私家に置かず
郡家に収めろと命令している中に出ている。

丙午に、四方の國に詔して曰はく、「大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛の
類は、私の家に存くべからず。咸に、郡家に収めよ」とのたまふ。

（日本書紀天武14年11月）

天武詔勅の中では「弩・抛」と書かれている。弩は弓である。この弓は光武帝紀の
記録に出てくる。

後漢書光武帝紀

軍陳數百里不見其後

旗幟蔽野埃塵連天鉦鼓之聲聞數十里列弩亂發矢下如雨

<http://www.google.co.jp/imgres?q=>



天武軍の武器であった「弩」は光武帝の軍が使っていた「弩」と同じで中国の伝統的な弓であったということ
になるであろう。天武が詔勅で郡家に収めよと命令した「大角・小角・鼓・吹・幡旗、及び弩・抛の類」は壬申乱
で使ったものである。人麿の高市挽歌と一致する。これらの武器、装備は唐軍のものだった。天武の将兵の私
有物ではなかった。故にそれぞれの将の家に置かず、郡家に収めよと命令したのである。天武の兵は中国伝
統の武器「弩」を使っていた。上の画像は明代のものである。この弓が「弩」に近いのではないのでしょうか。

天武軍の装備は唐軍の装備

齊ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響せる 小角の音も 敵見たる 虎か吼ゆると 諸人の おびゆる までに ささげたる 幡の靡きは 冬こもり 春さり来れば 野ごとに 着きてある火の 風の共 靡くがごとく 取り持てる 弓弭の騒き み雪降る 冬の林に 颯風かも い巻き渡ると 思ふまで 聞きの恐く 引き放つ 矢の繁けく 大雪の 乱れて来れ

人麿がこうに詠った天武軍の装備は記録に残る唐軍の装備と同じである。兵が持っていた弓は「弩」と天武詔勅に記録された弩である。壬申戦において天武軍は雷鳴と聞こえるばかりに鼓を叩き、虎が吼えているのかと人が怯えるまでに「小角」を吹き鳴らし、赤旗を翻し、弩の弦の音は冬の林を吹き荒れる旋風の如く、矢は大雪が降り乱れるかのように降り注いだ。

天武はこのような装備をどこから手に入れたのであろうか。「小角」「大角」など羊の角は当時の日本にはない。「弩」は即製できない。ではどこから手に入れたか。唐軍であろう。唐は664年以降6回国使を派遣している。

668年唐は高句麗を滅ぼした。高句麗滅亡の翌年669年唐は郭務悰等2千余人という大軍を送り込んでくる。唐にとってもはや朝鮮半島に於ける憂いはなくなった。本格的に日本國侵攻に向けて兵を派遣することができた。この軍勢が帰った記事はないのでそのまま筑紫に駐屯していたと思われる。

百済の鎮将劉仁願は11月に郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人を船四十七隻で派遣してきた。天武はこれらの唐軍と結んで軍備を手に入れた。

壬申の戦は天武・唐同盟対日本國

671年12月3日に日本國天皇が亡くなった。天皇が亡くなったのは「近江宮」である。「近江宮」とは琵琶湖「近江宮」である。

天武はこの時を待って蜂起した。蜂起の時、天武は自軍を唐軍の「鼓」「小角」「弩」で武装させていた。天武軍と唐軍は一体化していた。日本國の将兵はまるで唐軍と戦っていると錯覚したことであろう。人麿はこの真実を詠っている。天武紀(上)頭注には調連淡海・安斗宿禰智徳の日記が紹介されている。この日記には天武と唐人との会談の様子が記されている。

既而天皇問唐人等曰。汝國數戰國也。必知戰術。今如何矣。一人進奏言。厥唐國先遣觀者以令視地形險平及消息。方出師。或夜襲。或昼擊。但不知深術。時天皇謂親王云々

親王とは高市皇子である。天武はこの時唐軍から戦法を聞き出している。

- (1) 斥候を出して地形が平らか険しいか観察する。
- (2) 相手の消息をさぐる。
- (3) それから軍を繰り出す。
- (4) ある時は夜襲する。
- (5) ある時は昼攻撃する。
- (6) 深い戦術は知らない。

唐人の答えは至極当たり前のことであるが、天武と唐人はただ戦術を尋ねただけの関係だったとこの日記を読む訳にはいかない。天武には戦闘の経験は全くなかった。それまで唐と戦ってきたのは日本國である。天武天皇家には戦いの経験者がいなかった。その事情は蜂起を決意した時、「安八磨郡の湯沐令多臣品治に告げて兵を起こせ」と命令していることで推察できる。「湯沐令」とは「課税の収納を行う役人」である(頭注)。いわば税務署の役人に蜂起せよと命令したのだから天武にはいざ蜂起と言っても兵も将もいなかったのである。

だが天武は唐の百済鎮将とは深く結びついていた。この同盟があったからこそ天武は蜂起を決断できた。天武は皇子の中で宗像地方の豪族出身の母を持つ高市皇子を指揮官に就け、唐軍との共闘によって日本國近江朝廷に勝利した。壬申の乱は天武と唐との軍事同盟による日本國への戦いであった。

壬申の乱は天武単独の乱ではない。国内だけの視点から見ると乱の本質は見えない。天武は唐と深く手を

結んでいた。この事情は明治維新とよく似ている。長州は藩兵の近代化をめざし、ウエスト・リチャード銃、別名リシャール銃ともレカルツとも呼ばれている最新銃を装備した。これらの銃はスコットランド出身の商人トーマス・ブレイク・グラバー商社から買ったものであった。明治維新の薩摩長州は武器をイギリスから買って近代的な軍隊を編成して幕府に勝利して新しい政府を作った。

しかし彼らが手に入れたのは武器だけではなく。彼らは当時の世界で最も先進国であったイギリスから国家理念や行政制度も手に入れて新国家を建設したのであった。

天武の時代、唐は世界最大の国家でその軍備も世界最強であった。軍事的だけではなく国家形態においても当時の世界の中で最も進んだ国家であった。その唐との戦いに敗れた日本國朝廷は壬申の乱で再び唐の軍備をした天武と戦わなければならなかった。天武の軍は当時の日本で真っ先に近代化に成功した軍隊であった。鼓を打ち鳴らし小角を吹き鳴らして自らを鼓舞し相手を威嚇した。赤旗を翻し、扱いやすく命中率の高い近代兵器「弩・抛」で雪が降るかのように矢を放った。天武軍は短期間で日本最強の軍隊となっていた。

しかも天武は唐から武器だけを買ったのではなかった。天武は新しい国家理念、行政制度もまた唐から手に入れたのである。それが天武がめざした律令国家であった。

壬申の乱は革命ともいえる大変革であった。この革命は唐から全てを学び達成された。明治維新も革命であった。この革命はイギリスから全てを学び達成された。日本史上古代と近代の二度の大変革はいずれも当時の世界最先進国家と結んだ日本国内の反中央勢力によって成し遂げられた。その勢力は奇しくも関門海峡を押さえていた地方国家であった。